

しきねんせんぐう
式年遷宮の
社殿の建て替えに用いられる

和釘と野鉄金物が生まれる地

三重県伊勢市の伊勢神宮では、諸社殿を20年に一度造り替え、神様にお遷りいただく「式年遷宮」が行われる。従来これに使用される和釘は伊勢地区の業者が製造していたが、三条市のこの地域で多品目を、括弧に受注できる生産力と技術力の高さが認められ、平成5年に続き、平成25年の式年遷宮では協同組合三条工業会が約20万個の和釘と約8万個の野鉄金物を納めた。



伊勢神宮 内宮宇治橋 (1973年)
撮影 / 渡邊義雄
所蔵先 / 新潟県立近代美術館・万代島美術館

協同組合三条工業会 電話0256-31-2161



「鍛冶」の語源は鍛冶にあり。熱した鉄を繰り返して打ち叩いて鍛え上げ、伸ばして練り上げ、研ぎ澄ます。鉄も人も壮絶な作業の末、人前に成長する。

そのため鍛冶職人の利き腕は太く筋張り、二目その職業が分かるといわれる。ただ力任せに鍛をふるうのではなく、時に厳しくまたやさしく、微妙な力加減とリズムで鉄を鍛えながら無機質な金属を生きた道具に変える。心技体のすべてを求められる世界である。

三条には、古くから鍛冶職人が集まり、和釘や農具、大工道具、包丁など打刃物を生産する土地として知られていた。同じ鍛や鋳でも、田んぼの土に合わせて鋼の質や形状を変え、それ

職人の技と心に出会う 鍛冶の伝統



連綿と続くものづくりの歴史

この地のものづくりの歴史は古く、約4万年前の旧石器時代の鋭利な石を使った刃物づくりから、中世には大崎鋳物師による鉄器の生産など、たゆまない歴史の流れとともに連綿と続いてきた。

江戸時代に入り、包丁、小刀、土農具、大工道具などの打刃物や、和釘、錠前などの建築金物を生業とする鍛冶職人が活躍の場を広げていった。

明治以降は、鉄道の普及や機械力の導入によって販路と生産量を伸ばす

した三条の鍛冶は、生活様式の変化に合わせて作業工具などの新しい分野にも参入していった。

この伝統を受け継ぐ包丁、利器工器具、その鍛冶技術を基盤とした作業工具をはじめとして、現在は測定器具、木工製品、アウトドア用品、冷暖房機器なども生産している。そのほか、自動車や農業機械などの鍛冶部品、プレス加工、金型製造など、金属加工を中心に、多様な加工技術が集積したものづくりのまち三条へと発展している。



叩いて硬くなった銅を
焼きなましによって柔らかくする。

鍛起銅器

一枚の銅板が
美しい命ある道具に変化

1764年から1771年明和年間には仙台の銅器職人藤七が燕に移住し、鍛起の技術を伝えたとされ、以後200余年に渡り数多くの鍛起銅器職人を有する地域である。

鍛起銅器とは、板状に延ばした銅板を金槌・木槌などで打ち伸ばしたり、打ち締めたりして器を造形していくものである。職人が一枚の銅板を叩き上げ生み出された急須や花器は、手仕事ならではの優しさと温もりにあふれ、その独特な色彩は使う程に光沢を増すという。明治期にはさらなる技術研究が本格的に進められ、現在では美術工芸品の域にまで達している。「用の美」が生み出される手仕事の息吹を感じてみよう。



鍛起銅器の美と心にふれる

金属加工の技が時代とともに発展

明治時代に入って洋釘が輸入されるようになると、和釘の生産は大きな打撃を受けた。しかし、産業の命は途絶えず、職人らの技術はさらに多様な金属産業の発展につながっていく。燕では江戸時代中期に伝えられていた鍛起銅器の製

法と、近郊の山から優良な銅が産出されたことから、銅器やヤスリ、煙管、矢立など、別の金属加工業へ転換。こうして枝葉を広げた金属加工技術は、大正時代に入ると洋食器の生産に活かされ、発展を遂げていった。

類まれなる技に出会う

技傳承される の世界

金属加工技術の花ひらく 今も衰えない輝き

和釘づくり以来幾多の業種や分野にわたる変遷を経て、長い年代培ってきた金工技術の評判により、明治44年東京から高級洋食器製造の依頼を受けたことが燕の洋食器産業の始まりであるとされている。また当時はノコギリとヤスリ、鋳による手作りであった。

後に第一次世界大戦の頃、ロシアから洋食器



の大量注文が無い込み、燕の鍛冶職人たちは一斉に製造に追われ、このことが洋食器量産化への転機となった。やがて動力機械が各工場に設置され、大量生産へと転換すると、飛躍的な発展を遂げた。

ところが、日中戦争が始まると海外への販路が狭まり、さらに戦局の悪化で、技術保存のための数社をのこして生産の全面禁止へと追い込まれることとなった。

しかし戦後は、進駐軍から2万世帯分の金属洋食器の注文を受け、活気を取り戻し、ついには日本の金属洋食器生産額の9割を占めるようになった。また、アメリカとの貿易摩擦が問題になるとプラスチック柄のスプーンの開発など、新しい活路を見出しつつあった。

こうして燕の洋食器産業はめまぐるしく変化する世界の政治・経済情勢の影響を受けながらも発展を遂げてきたのである。

こうして燕の洋食器産業はめまぐるしく変化する世界の政治・経済情勢の影響を受けながらも発展を遂げてきたのである。



「燕三条 工場の祭典」

燕三条地域の企業が一堂に集って、年に一度のイベント。高い生産技術を誇る工場が、普段は閉ざされた空間であるものづくりの現場を開放することで、一般の方々もものづくりを見学・体感することができます。



9月下旬～10月初旬
「燕三条 工場の祭典」実行委員会事務局
一般財団法人 燕三条工場産業振興センター 産業振興部企業支援課
〒313-0117 三条市須項1-17 電話0256-35-7811
http://kouba-fes.jp/

発掘調査から見えてくる

遺跡が語る 三条の『ものづくり』

三条市内では旧石器時代から現代までの各時代の遺跡が380カ所以上発見され、学術的に注目されている。弥生時代の経塚山遺跡から出土した「鉄斧」など、鉄製品が盛んに利用されていた地であったことがわかっており、その他遺跡では大規模な鉄精錬跡や、鉄鍋の鋳型も出土している。その中でも町遺跡は大崎鋳物師と呼ばれる職人集団の本拠地と推定され、その生産活動を物語る貴重な遺跡である。刃物づくり、道具づくりにかける先人の想いは、ものづくりの心として現代にも生き続けている。



鉄鍋 (藤ノ木遺跡 出土品)



八幡宮鋳口 (三条市指定文化財)

その使いやすさを追求するのは職人の意地。使い勝手のいい道具は手足の延長だから、鋼が研ぎ減っても修理して使い続けたいという。

現在でも、製品として送り出した刃物が何年、何十年と使われ、研ぎ直しのために鍛冶屋の手に戻ってくる。「愛着を持つとずっと使ってもらえる道具がいちばん」と考える鍛冶職人にとって、これほど冥利に尽きることはない。

多くの伝統的な技法と同様、鍛冶の世界も習得に長い年月を要する。三条の鍛冶職人たちは、受け継いできた技術を後世に残すべく、力を合わせてさまざまな活動を展開する。現場の見学案内や鍛冶体験、刃物研ぎの実演などを通じて、道具の良さを一人でも多くの人に伝えようとしている。優れた道具を生み出す技術と、それを大切に使う心。日本が誇るべきものづくりの精神を、もともと象徴している製作現場といえよう。